

丁寧な「しごと」へ



三田農林株式会社
(盛岡市)
代表取締役社長

三田 林太郎

2009年12月、父から会社の経営を譲ると突然言われました。社員一同で思い切った商業施設「クロステラス盛岡」を開業したわずか2ヶ月後でした。すでに先ほどのことも忘れてしまうような認知症になっていた父はそれでもはつきりこう言ってくれました。「いいか、思い切ってやれよ。トップが揺らいだらダメだ。」

クロステラス具体化の前から私は人口減少、高齢化する地域において、「中心市街地を元気に保ち」、「敷地を低層のもので活用し」、「我々は入居者の相談に親身になる」ことが不動産の事業には必要になると考えていました。クロステラスの事業はお客様を始め、様々な仕事や活動をしている方々と一緒にやっっていくうちに、社員たちがこのような事業に必要な力を自然と身につけていった、と経営的に言うことができると思います。

クロステラス10年の歩み

開業前は考えもありませんでしたが、年間2

00回ほどのイベントを皆様に開催していただいております。シンポジウムのなまじめな内容でも聞いてくださる方は非常に多く、音楽ライブではここではこの曲を演奏しても大丈夫だろう、と特別なパフォーマンスを披露してくださる方も時々いらっしゃいます。アンケートをいただく割合も非常に多いです。

お客様からいつも励まされ、差し入れをして下さったり、就職などの節目に報告に来てくださる方もなかにはいらっしゃいます。初売には餅つきを行います、子供の頃、会社の裏で大工さんや飯炊きのおばさんたちと大晦日に行っていた餅つきが、かたちを変えて復活し、地域の方々と交えてできるのは嬉しいことです。

「クロステラスができたことで盛岡のまちなかは踏みとどまったのですよ。」と言われることがあります。弊社の創業者は世界大恐慌の時代に大通り菜園を造成しましたが、クロステラスもリーマンショックをくぐり抜けて開業することができました。出店申し込み

がほとんど一旦白紙になってしまったときは、地道に地域を大切に頑張ってきていても、世界の果ての見知らぬ人たちの事情に僕らの運命は時として左右されるのだと感じましたし、影響されない強いローカルを創れたら、と思いました。

東日本大震災は開業後1年半も経たずにやってきたのですが、幸い建物にダメージもなく、閉館したのは3月11日の夜だけ、というのは今でもささやかな誇りになっております。何年にもわたって、被災地の様子を伝えたり、亡くなった方やペットを悼む催しが行われ、そのときに初めて教わることもたくさんありました。昨秋、10年の節目のリニューアルをなんとか進めることができました。

多様なまちづくりへの参画

クロステラス開業によって人間関係もグッと広がりました。カワトク、MOS、フェザン、以前はななつくと、市内中心部の商業施設で毎月集まり、様々な取り組みを行って

きました。最近では「盛岡まち歩きマップ」をつくり、高校生に英語版の協力をいただいております。震災後は市内の各商店街に散らばる後継者たちとの交流も定着しました。今後は有志で毎年東京以西のマチを朝から晩まで歩いて、夜に徹底的に話し合う、ということも10年行っています。それがLRT（低床式路面電車）導入などのまちづくり・公共交通への提言づくり参加に繋がっていきました。

クロステラスは30年以上かけて古い住宅群を壊してつくった再開発であり、借入もかなり背負いました。今後会社として大きな事業を繰り返すことはもう難しく、不動産事業は古い木造の家のフルリノベーションを手掛ける方向に自然と向かいました。昭和30、40年代に木造貸家を移築した歴史以来のことです。

築90年以上の家をちゃんと直したところで借りてくれる人がいるのだろうか？ と心配だったので、「古民家の味わいは新築と違って二つとマネできない。」という地元の工務店のアドバイスにも背中を押されました。これまで、個人宅、ケーキ屋さん、カフェ、定食屋、オフィス、ジュエリーショップ、ゲストハウス、ミニアートギャラリーなどを、お店をやりたいという素敵な方々と、地元材を使う柔軟な仕事をしてくださる工務店さんたち、地域の方々、弊社社員などでワイワイ言いながら創り込んできました。仕事とはいもの、そのプロセスは本当に楽しくかけがえない時間でした。

農林業経営の祖業から考えること

クロステラス開業前に描いた事業収支は思い通りには進みませんでした。自分も社員も人生や仕事は大きく変わりました。

農場は事務所もメンバーも替わり、チーズケーキを作ったり、土壌の改良や、リンゴの木植え替えもずいぶん進みました。北海道の100年以上続く牧場でもようやく地元若者たちが定着し、勉強が嫌いだったのに人工授精士の資格を取る者も出てきました。アイスクリームはこのたび、2020年の「北のハイグレード食品」に選ばれております。

林業に関しても、広葉樹を大事にしたり、スギ林でも伐期を100年から120年に延ばすことにチャレンジしております。また、



当社のリノベーション物件
鉈屋町の「とととゲストハウス」

岩手大学と独ロツテンブルグ大学との共同で、質の高い大径木を育てることを目的とした将来木施業の試験地もつくりました。

ここ数年は、海外アーティストたちとの交流や、社業についての説明の機会、森林の研究機関についての評価、森林や林業をどうしたら活性化できるかという業界内や産業界との会議などの役割が出てきました。特に数百年間各地で継承された家族中心の林業経営は、担い手の一形態として消滅してはならない、と言っても行政の方にも研究者の方にもなかなか理解していただけません。

創業者は昭和5年にすでに「農林業は利益を伴わず、むしろ損失は毎年発生する。しかし国家に貢献し地方の後生に資する」と語り、三田商店の事業をもって個人で購入した貸家群を農林業と併せて、それが三田農林やクロステラスの形態の原型となりました。昨秋参加した東京の大学でのローカル経済のフォーラムでヒントを得ましたが、今の日本人はすぐに成果を求め、欲しがります。しかし、世界には「待つこと」が大事と考えている人たちも未だ多く、森林の仕事やまちづくりは「未来世代を信じる」ことによって進む仕事ではないかと気づかされました。

最後にコロナの感染が収束を見せていません。レベルは違いますが、農林業は常に菌や害虫との戦いです。今、個人的に、何もかもが動画配信やテレワークに寄ってしまい、インターネットがとて不寛容なメディアに思えてきました。何か別の多様な表現を考えてみたいと強く思うこの頃です。